2024/1/21　　「 物事の裏表 」　　ルカ 19:45-48

２０２４年も早くも半月を過ぎました。例年よりも、寒くない日が続くように思いますが、兄弟姉妹の健康が支えられることをお祈りしています。今朝も、先週から始まった「エルサレムの冬」の一場面を心に留めたいと思います。

祈りの家

「断捨離」という言葉がすっかり定着しました。物がない時代から、物が溢れる時代になったことの証拠だと思います。信仰の世界でも、最初の燃えるような情熱から、だんだんと固定化、形骸化した、マンネリな状態に陥ることはよくあります。

イエス様の時代のエルサレム神殿は、立派な建物と大祭司の一族によって、巡礼者たちで賑わう聖地となっていました。しかし、そこでなされていたことは、法外な値で売られる捧げ物や、政治と癒着した指導者たちの横行でした。人間の弱肉強食な考え方が、神殿の中でも通用し、それをイエス様は「強盗の巣だ」と批判されました。この言葉は、預言者エレミヤがかつて、イスラエルの指導者が搾取や権力に堕落していった時に、用いた言葉です。同じことが、主の時代にも繰り返されていたのです。

「祈りの家」は、預言者イザヤの言葉の引用です。イザヤ５６：７には、すべての人々が、悲しみから解き放たれて、喜びと賛美を持って、主を礼拝する姿が語られています。神様の愛を知っているイエス様にとって、主の宮は、決して搾取や権力が振り回される場所であってはならなかったのです。私たちが戸惑うほどの、主の激しい「宮きよめ」の行為は、この愛を勝ち取るためのアクションだったのです。

物事の裏表

一つの出来事には、裏と表があり繋がっている、と言われます。一見、悪いことや不都合なことも、そのことが自浄作用や転換点となり、益をもたらすのです。逆に、人から称賛されること、羨まれるようなことも、表に出せない暗い部分に、うめきや孤独というしわ寄せが隠れています。エルサレムの冬の段落で、イエス様は、いつもどこか寂しげです。この箇所の前には、エルサレムに対して、憂いを帯びて滅びの預言を語る姿があります。宮をきよめる主の姿は、明らかに権力者たちを刺激しました。ご自身の立場を危険に晒し、ゴルゴダの丘を引き寄せました。

このエルサレムの冬の出来事の裏にあるもの何でしょうか。それこそは、すべての人を愛する、神の招きがあるということです。表面的には、どんどん色あせていく主の姿ですが、それは最終的な復活の希望と、罪の赦しという恵みと、永遠の命という約束を、確実に私たちに指し示す、救いのわざを成し遂げられた姿なのです。

私たちに示されることは、祈りの家を強盗の巣にしてはならないという言葉です。教会が、ひとりひとりの魂が、この世界全てが、その御心にかないますように。